

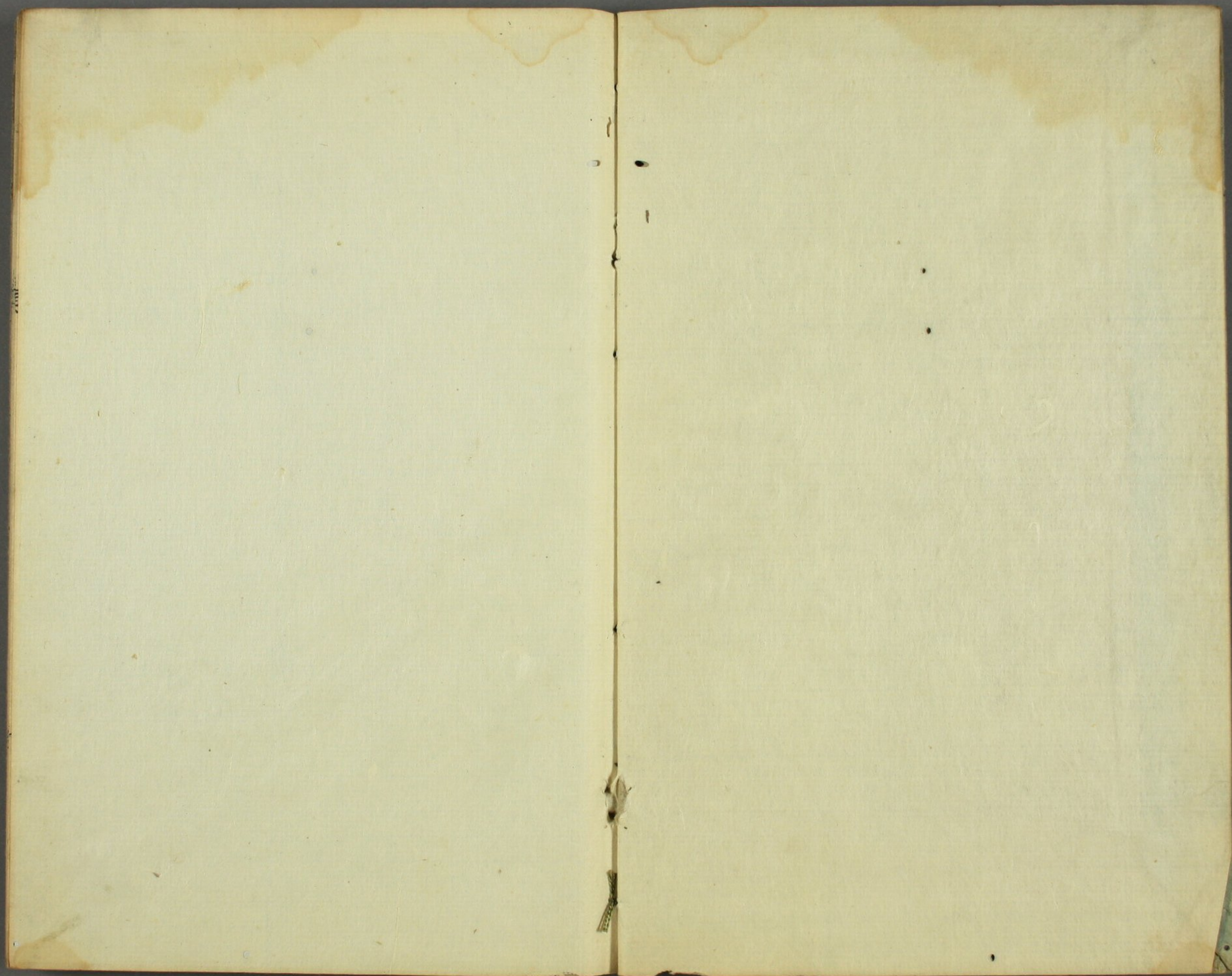


里々々々

中村俊定文庫  
文庫 18  
525  
3









くつろぎ



教句の事ハけりて海心の味之を云ハ山里ハ万葉おそ  
 一梅の花ハけりて山里ハ新歳おそ一と云ふるは  
 お免は笑ふと云ふ心のそくに於て海心教句之山里を  
 万葉の迹ハけりて此ハ平句の位あり先師も教句  
 無五合をのち知る一と云ふより一何の能書も傳へ  
 題乃中より生れし事ハけりておそくも大振あり是  
 師此云教句此抄協の物才三此との平句のおとを位あ  
 るものとおとくにかく云ふハ何れも位を足知る一と云ひ  
 又いそくをとり合はるに句此ゆふひやま歌歌有と云





そ一討も傍るこ門人ついに心持へ言詞をり

又いそく人の方よし好に扱ふゆ平持あり有り誦向季  
の三聖合障りなりを考へ一旬作りハれは一子白  
出するハもるおるり一くはれとて

ご一此ねる何れとを年業且に用る事りといく  
と考へて侍れハ師のいそく連人のつさあハれ端よ不  
及とて去年今年喜季の事とてあつても季に心とあ  
と成へ一と一昨のいそくもれうらに故とあたりてはる  
城軍とのと句ふあつくと望なうや侍る古とと人  
中におもはれぬのふあひとやうに説出れ一と

多尔系及此教句はゆりやホ乃言結するハつ祿もは  
読て小そのおのひあつる當りハ一代二之句ハ色分の事成一  
より當りハ至て詞強一かりそ老よひむかむにわく吹ぬつじ  
言振のまゆれとけまわりといふも至てはるくひとれ一事  
その答に應一して清澄川此写りある水のまゝ流といひて  
事一此を教むと説とて一へま西城やといひ捨るもあり也  
といふまを後といひてまをまをまとも古新るとにも後  
皆句他の亦なる一と昨の教し

師のいそく下句上句も二一字之字此る小阿里まてそれ二  
三字にまぬり落る句阿里骨折へま



師のいそぐ持てある詞といふ有りて人に人の名取ともある  
こと

師のいそぐ素秋のゆせぬ方先より一書に習ひし時よある一  
日いそぐ花より一燈付ぬるハ志あてりも一たは法度のこ  
日いそぐ能諧ハ教てあるは亦有りよく通るにあり或人乃  
と云ふハ若て通せんた袖とかとて是るや一して毎る物あり  
師のいそぐ或人の句ハ艶をいそぐと云ふに依て句艶はあはれ  
と艶はふり何れも又或人の句ハ志有りか一志ほらんはる  
れよ志ほるなり一又或人乃句と作して心の志を去る  
ふ乃他あり一詞乃作好へしはと

又いそぐ格ハ句よりと取るこもあはれにありひか一書よある  
と付居士のお城は居士と出を教へてせし儀あり一たは  
一書ハ其後の居士はして何やまらに必しや一書よあるは  
教句ハ門人とも作若ある附合と老吃のちよとらひか  
とと或他よある

句れをいそぐはのこかともありあつて人々の勝を志する亦  
もの好まざるによりて言下に心乃とくはあつて人  
をよきと一と師のいそぐあり  
師のいそぐわらうも多くの集に本語り多し是城より  
と本より門人の志といふ二三句か一つ本依て亦は仙一



宛是もいつ人と初くして志城いふ事あむ一ノ号城友  
 の小文とせん又小文と斗やまはは号と或方而て能え侍る  
 ぬち刀とつふ言はけりわ至宜集の名と思ひあむる之書  
 号によれりまことのなりと考に足室一ノ掛号はあさ師に相  
 万よんを以有ゆ之 隙ある能諧の時言やまらふ白に月城  
 師一是城月よま一とて秋を付ゆ一八月と云月城  
 出せり月秋の堪取まよひやま出合考れはうそゆ一これ効  
 ちくろりと能去りま

牡丹は芍薬と付るゆいある師一是らんの好取まて差合ま  
 いわらけ付らる傷あむ付く粒うゆ一と一と師乃詞之  
 万よ此取ある一ノ門人らめてまへま事一

隙のいよく相似する白ハ集にまを時外まをほまらりく  
 せらるよう一後猪養又師は蕎麦の花の白猪籠蕎麦の花  
 一亦まらまこと並侍ると之 付ゆれらねいろく一いゆれ  
 時りあゆと流く付心の形をみちをとなしてまへ一と  
 さゆ一白と侍まて又侍まてま一もあま

又猪養に招三と二体は侍まけて那一並まらり心付てま  
 一と之身ハぬれ紙のより亦ならこといふを云出侍れハ師の曰  
 是一體形まて侍まて之体格ハ定加一ふけて勤るに於あむ  
 又琴三味線の粒白ゆいして世上あつふゆいこりらまよ白



しそえよといはく句他りそるれ一討もある道よとむ  
若の勤る亦かくのゆもわるとふし

或二子他語よ志ありて奇仙二と老翁よ長談よ  
師をさけ次再之の後その人は對していよく語秀他之  
志うれも我おりふ亦よ非を志ぬてとんとせハ是徒の内け  
二とちり句と捨れ一抄や者侍人とこその人狩さひやま  
そくそ終よせ師の門み入とちり

師の白句ち天下の人よおたるゆハやせー一人二人  
かあゆるゆかす一人乃いぬよなれゆに侍ハなりよかん  
とたこれの詞なり

師のいよく他語おありふわも能出の物事やうにけりや  
此ハ初心道をそとちふあわりととらいつれを西とととも  
あつともあつらふ後句をらぬるにらるる位をさく位は  
無くても身をゆるりと振さくは詞ありんう末此迷ひてたを  
おろそかにせんやをあまりに付てらよこめてはくしものこと  
師の白其角ハ白席に連るに一座の無よいる句をいひ出て今  
いつても感を師きつ座そのゆりてはよ人乃いいる句を  
あるゆも有とさあつらふゆと云く座よらりて一座の人  
よとれく句をそあおふゆあ里門人者よらりて一も角ハ  
生質とくそくにけりよと



又いづく一とせ當面乃始つひ出れ侍るは此譜終より  
 甚あつて二と目録一戻りてと示されし之面白教に  
 わる時心見よふ仙一巻四峰してと侍まハ裁おりの所よ  
 見知侍る之けよふ所那ー狩秀おハ時の仕合様様と  
 ひも變万化口の弁より感まへー氣も變も但まへーと  
 詠集のころ變うた白あふよーとより侍まハ作のつく  
 ぬわる白ハ格あゆのゆさりぬくてまぬさるとまハはぬ  
 白とさふへー笑ぬ白多ーと

原白依りふされし時腹は裁りのいまることと感心の執  
 老師のあふ節まうとく私をと作る所之えを勸されハ成る中  
 つふりなりと私をを修る工夫して私を中ある道有へー  
 師ある時土芳小とあつた此に云つても横様とはあま  
 後の此譜してとま後わすし此云節の初その謙の此譜と云  
 奉ハいなるゆにくとまつゆる原此をまぬふに余を  
 き此譜のゆなる下原も氣にぬされハ節念那と此譜  
 ハあそつてねといふれし

原の白まても再之吟して狩らぬことやせられ侍り  
 その白奉付よ人もまうせんとまへるゆもかりあり  
 おろそくもさる所つ人へてつされまへる所  
 人の白あまて白の藝向いろく妙法さるゆはへる所



或丹次の座にてまゝを門人示されしあり

師のつく他譜を娘の他譜を年一む人ありひとこも  
のうしも道を志しする事ハかゝるあやまちもあらず  
その取なふゆせよ他譜なるさるゆえなり一人を他  
譜とてしをばと他事をたのむと

師乃神楽堂と云句を稽する所の有師のつく他譜ハ安話  
と申ゆつに神楽堂といひあつて侍れハあき事ハ知  
れとこそ後にはをきつていふ人あり師の白唯一の神楽  
ハ神楽殿と云ハ神楽堂といふむつていひ分て  
益ふたれ他譜ハ神楽殿なりと云はれと或他者あり

季小て並の句をつとと並の句小て季の句をばむとむ  
つハ娘も今ハつてか後と

師のつく他京にむす時ハつてあけおを見てた  
をらよぬてあづき字一々静に句をていふれぬ  
好もわるむとその好もあふきまふて稽かふとさる時  
まゝのまゝあつていふと師松傳あつて句なり大切の  
師乃つく他譜ハ益ハ俗語を正しつてはよ物をあそふ  
まゝにけはしハ人のあふぬ所大切の事と傳へられ  
師のつく他譜ハ益ハ俗語を正しつてはよ物をあそふ  
まゝにけはしハ人のあふぬ所大切の事と傳へられ



やうのふとやうは又へはるゝなり

原のいよく撰集懐命短尺未だあへー未やうハあう有へ  
そくはうーかぬんきひありたーとこ様との終るゝはれも  
とかたこ佐若れ名大まういやーく又くはるゝとこ

終るのおかると小ハ奇の詞を承ふと遠くふり必あり  
ゆーされあへうーれかあくとれつきた時の拍子又さあ見  
くふーき取半遠へるゝゆあーとこ

師考に我をわしれれらきひあるとこ或方あく未人作を  
座上は讀ませうーゆまうと原の白け取似合の取也  
最若くは席を付れハんまうあうれ此階は遠く來侍る

のるんまうにと形ふこむのゆこ又ある旅りの付門人ここ  
子供ひ出れー西雜波のきうーこねさありあうて  
雨の薦よををうーく入りやうとこその後いゆさうハあ  
於此地あてハを合め抑の身と忘れてあうーとこあを  
かると價を人のいふとくに毎もぬーはるゝ

原ある方又客よめく合の後蟻蜂とをやあーとこり  
果のあま事服よとていせりまうとかくおのるゆふ  
それ自分の執能階こつとつとくいゆらも又かんのとこ  
とこ客の執能階こつとつとくいゆらも又かんのとこ

あるとこ此旅り乃の記とこーまうのーあうとこあま



乞をこひて父母とまれし師のいづくはのこる所あり  
死て後見侍ハ乞とて又阿利れ西て又多所もあつて  
感んたる詞見されともあられぬ

師一とせ岐阜糖飼兄の時糖厨一人は十二所宛舟并舞  
して其ひりよこれとて十二節の繩をて横めとられ  
はとれむつてさゆさゆやましく乞をなす糖厨はひり成  
るは侍れハ是れらぬぬよりさばきてたまはれぬぬの  
を又さうむつてくられぬぬのひりまかつけさく  
とより方ハ此ハある處とあり

阿の門人のゆをひいてかれぬぬははきよとられぬぬを付侍る

やにまへていふ事なつてもあつてた世情はあま  
人情をせされハ人々相まて宜友あつてハかり  
又いよく人乞非なる節多し今其地あるへんは  
多言人の方にもかりかとい老後まらん乃さるるもあつて  
え侍るすあり

一とせ大和の法隆寺に太子此開帳をその次に冠えお  
ゆつて侍るて後の開帳は又整れてかゝる古代のりれを  
いよひて整立れ師のいのかとさひやへ

ある禅僧詩のゆを考つてゆつて師の曰詩のゆハ  
士志堂といふのけさぬ好むと好むのあつて人も名をたれ



多しかきつひよ云詩ハ隠者の詩風雅少て宜と云と  
 原のいづく定家ハみそ此秘前にとぬ人を入とつ不後ある  
 この秘といふはそ難なる秘をわくする所をいふと撰者  
 の身とそそまらぬる所をわくする所をいふと撰者  
 難ある所も難いといふこのちねを秘とらふとちねの秘を  
 一先と師といふと云

仔細くみめて水のおととさふ花のちりかきと  
 一と五文字秘骨のあたると師のいふと

渡川たぐきかゝるうた嫩田もうさか人たわな清めや  
 このあたゝとつハむらとつハ字何とつハ字二説あり義  
 理ハ何とせんぞ人よわとつハ字とつハ字も定家ハ  
 の云何とつハ義理を結て又さういふや一説とつハたぐ  
 水のことといふとつハいふとつハとつハ七師も義理と  
 語るハ一とつハおとつハとつハとつハ

古今此序に於人のうさけはも我かめく難とつハや  
 貫之の事なせる師のうさけとつハにわくは人の此  
 秘骨乃亦を足影一貴したる所とつハ撰法師の賤の云  
 乃ち我處とのあたゝとつハ人ハいふとつハある所とつハい



を可味と

かうたのちハ秋とを玉とらふよりかきて文の指とあるく  
き空のひと光る空のひ秋天乃ち秋けりかと指よりひ  
きること多しち秋のひと光る空と秋向はくさうり  
秋向の本所らるるをわめける依り

漢庭ハ言高砂の島うまたるひさしこれくたるくちり  
又漢西何る家管座などの秋よりひり空家ゆふに後をね  
の陸能登り秋幸の世手に新家へ三首のち何り秋庭上  
冬業といひ西て家おぬ南此海のをぬひさし久しく秋  
秋の志と菊と漬りけりハ漢家のひさしと志と秋と庭の字

落影ハ信者より足由はれはのちひさし久しくなりぬ  
又何むとて是ハ久し秋といふ枕詞之序舞之

法濁りると清ハ雑なり清ハ濁るハ恥之かま衣が衣  
この二と清ハ秋庭下を濁るは旅衣の秋之

けしひめさよひ色さ保娘は之信ておき下を濁るは濁るハ  
二ツ物をつくるハ必あま酒も大酒といふさけとにる秋之  
濁るハ和くく理之清ハ陽濁るハ陰之ハ陽まむハハ  
陰濁るは数ハ陽二ハ陰之

吟子春のの陣れいとく季吟老人よち西の附は傘に喜の  
夕くれ指言くきて写るとさひて白をまくとる貞徳の



ふいふとたつひらけにき人のいよく貞信も古今借定乃  
 人ふはくは金白をせらるるひとふり一昨のさかあり  
 い歩の浪萩芦にわは萩は似るあまを別之公せは限之  
 角組と萩葉一葉之糸主祐親娘浪萩と名付れり  
 伊也の海幸るれ海石見の海楽國の名ふれも名ふはる  
 糸をかきていへる旅のゆき

甚るはやみぬくつるまもぬりつるにきる三月をふ  
 二月末より用るる正月二月よりあを甚の雨と二月を  
 五月雨と云晴るなれやりに云とのく六月夕立七月雨  
 かるへ九月秋時多之十月時多を後を言とそれなり

いひある之鳥取之四月七八月の方にきくうへ

東風春風と東風國凍と虫文有友は南風秋は西風冬  
 冬少風と僕も君と之和まきあその妙法ふりされも  
 その心もいひあるへさうなま嵐なれやりにきる之甚はかれ  
 花も花をいひく嵐と和まきあ秋の初風と嵐と云  
 中秋あはれ風を野分と云初冬は風を木かりしと云末の  
 冬にきてハ嵐ハ初る似たりやりに連ぶるは月と

管四又月よると秋とも用る時六月雪は異れなり  
 秋すてもかきえ一日くくそこのうに鳴く秋もふく初秋  
 日中よハ不鳴曇りハなく 夕立ハ夕時ふらふ



あゝ秋も過ぎ去る後もあるやうにと連珠云

帆の舟入達の舟入も夜之むし一紀の風詠よりさよふ入

そと帆もふ今より一程詠よりいさく是を送と云今此舟

入舟送之詠も此舟順送もに反なり兼くうしと師

の云こ 如奇ぬハもひる字をにとふむ之縁をえにと云

難波とちあをとりひ葉をらめと云

ふ乃釣ハ心のけりきと云ひ予の釣史陰の去りて此を

いふなりふ乃ねハあまのふとさうなるふと待りあもて

つとふ心の杉も不変れん又春のふとさうのふ

とも云 藤は麻史なれはあまのふとさうのふ

写子舟回る細る植物、結ひてはるこ

田舎ハ水色う里らうく写括よまるなり

朝の月ハ十七日より廿八日まで

魚よる春されハ野こみ先なく魚よる声よ又この云

られかくにといふ者難子とふ老皇又詠をもよめと 霜

氷の岩根よはる魚よる浪の枕やまひさぬうんを詠こ

空あけの云魚よる春の香こさあり師の日記くあれも

たゝ喜れ小春のつらきとふと多へーと

妹居説あるとあけ詠よハ冬之連珠大秋よ用と

つらきとふハ四季の詠よつたの月れはるこ



一、いふまゝに詞をさし、依てきみきの名をわけて山姥よ  
もよめる、作のいよくけ、新のゆきもさかむるものごと  
いふまゝハ昔の月をうらむりのうらむに、世奇みさか  
苗代の代をうらむかゝるといふ義理を、その苗代地をふ用  
し、新の月をよむを好む義理のことなり

夕まづれりゆきりて夕の月を云ふまゝなり、秋をうらむる初め  
秋をよむいふこと、秋をさしつゝなり

夕まづれりゆきりて夕の月を云ふまゝなり、秋をうらむる初め  
秋をよむいふこと、秋をさしつゝなり

氷の衣といふゆきの氷のうらむにかゝりて有て糸をたれと云ふ  
ゆきを佛道といふいふるゆきりて、ことなり

是の内のいふる、かゝりて連発よりいふ事なり、あり  
霞を夜と云ふ似ぬもの、夜の露よりいふ事なり、月星  
は結ひてするより、連発よりあり



月の影と上の句下れ句小節と連三句いさゝか月又  
月山ふ照日そいさゝかおと云々俣物お日此影屋ち  
うら之俣物たうてい云うこー又人といさゝか偈也表や  
流をもいふと連去あり

昨のいづく大方の意よハ何のなりぬらんたれとにおくハ  
淡へりけいさハ略立派は務ッお之面白くそ之

あるひハ師宗匠との方へ句此趣一を致ふ時きて出さ  
法ありたえハ一吹向り一時書籍とてくわく三句きて自費  
とてふ方といさへ一ハ懐紙はまふあるへハ別紙はきて  
宗匠の方を添削のうへまふ紙はまへ一そのま紙はたえハ

うはあけけー

大勢の喧花仕切は淡の方  
淡の如く大勢を吹かて

匡引巻一を致す

葉風

芭蕉先生

又云く  
慈介

何氏蘭風

何

人の方へ句を送るに折紙と認括



半抄子磁立送り	何 ~~~~~	手号月日	芭蕉指
---------	------------	------	-----

或ハ半抄公を存人ニ依テ昔早ある  
 人よりテ其申すも半  
 抄も磁を送りたるも半之  
 紙四ツ折一折ニ定メ名氏号を其紙  
 付紙と張る付紙は赤きを用也  
 牌又青紙を用也  
 外包ハ紙袋を用也界一之上包也  
 拜机 合爪  
 たり、昔早に由る

名氏送り時折紙読指

山岸氏	宜為車来作	手号月日 芭蕉判
-----	-------	-------------

又何氏何右の紙も

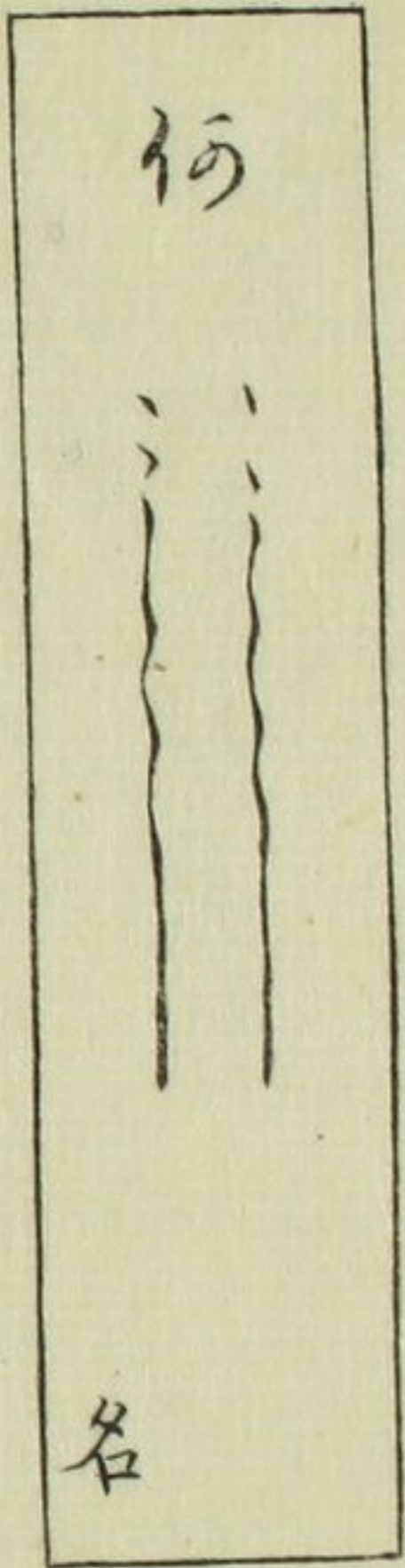
宜為何之書作

自分  
名判

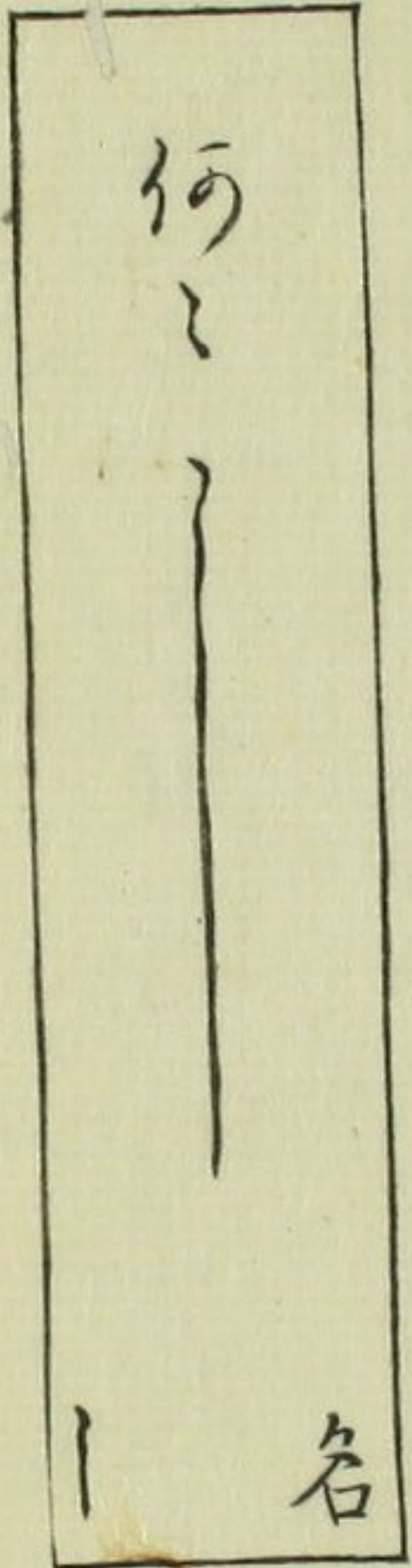
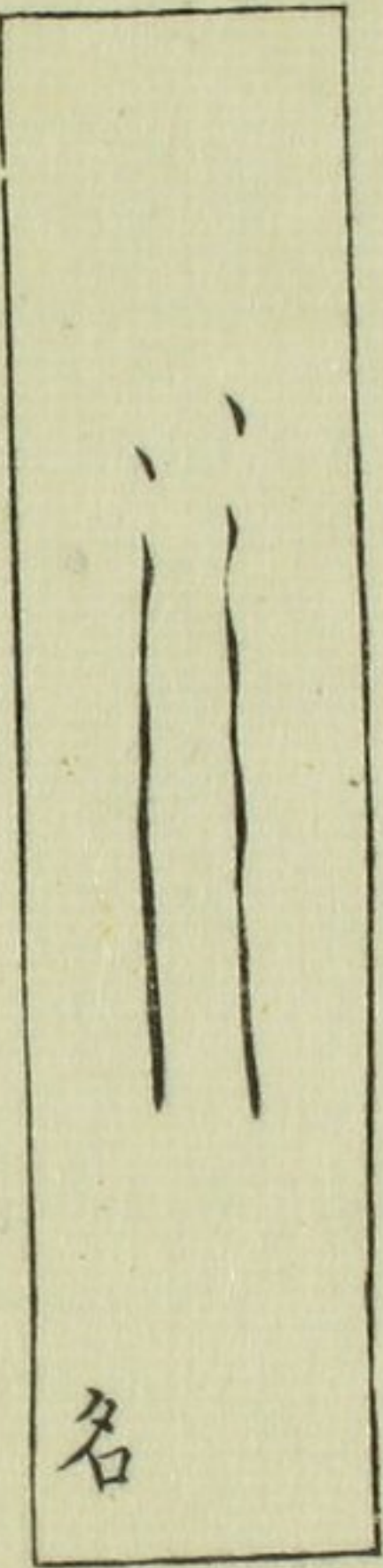


色紙短冊乃り

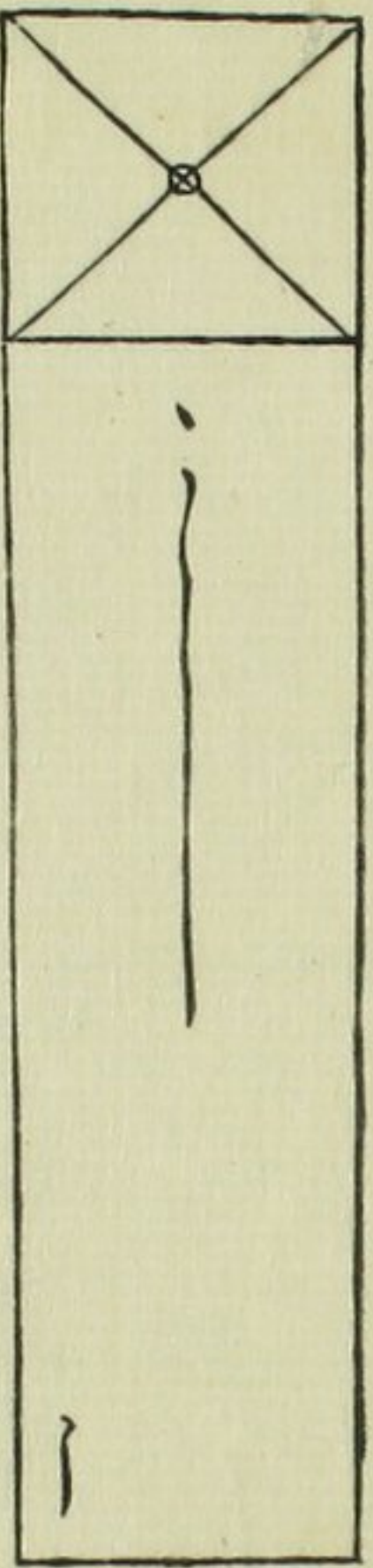
紙の上下のより寄らざる雲の方よ  
俤の時よは雲の上よ



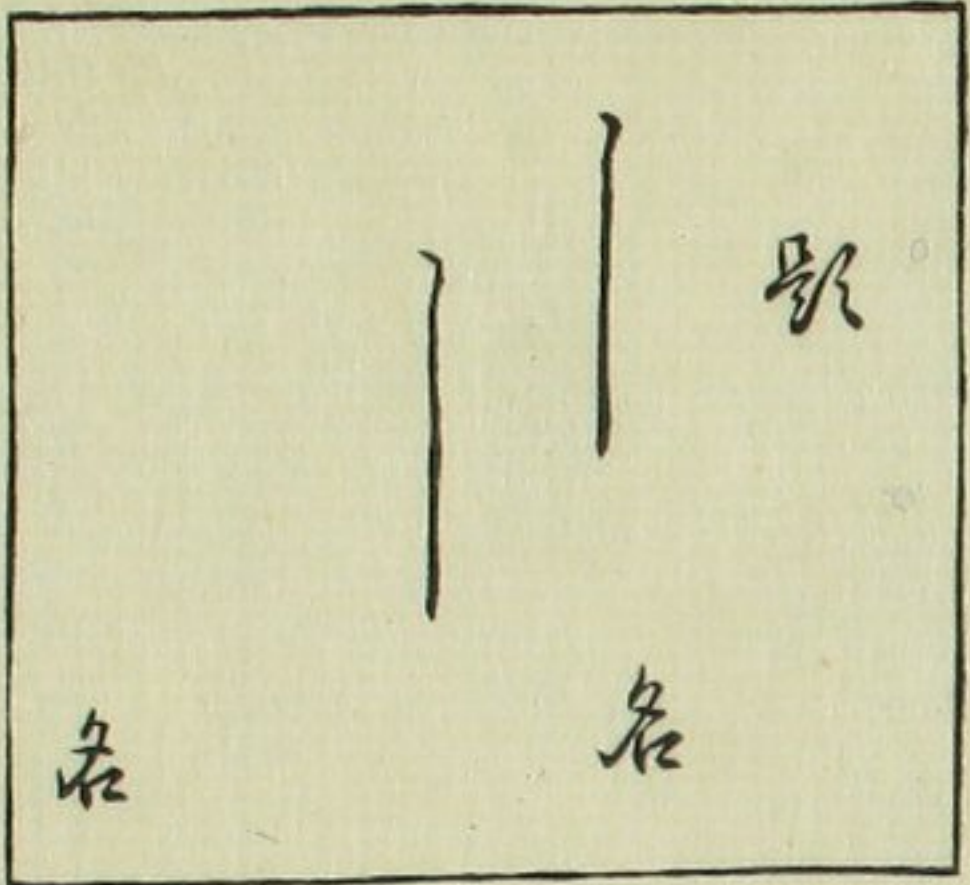
名ハ扱ハ素早下之



三折一丁去歌を去時之  
歌の下宛時ハ一字上テ  
去歌あるとも下つる時ハ  
一字もよる



花の短冊を介あは付る時水引あて付る一節之付るあり  
さし色ひとらよえて一むさひく付る  
あり宛紙のく四角にをま甲に空を付るよれと



名よ色よハ八分

名の手扱は通若店号  
まつりる時  
菘虫庵服部土芳  
店主ともまつ  
菘虫軒 服ア土子  
雅戸氏ともまつと



奇打紙二行七字

之打之字

霽	いつる日にむふあじの 岩より水く時雨里く むく岩のさ
---	----------------------------------

紙の折やう  
つきの料紙  
のこと

<p>飛ろ次乃りけのく みのやふきさくけみま 里もぬくまきさめ そつる</p>	
---	--

# 誹諧書林

- 江戸 西村 源 六
- 伊州 内神屋三四郎
- 京 井筒屋庄兵衛
- 野田 治兵衛
- 西村 市郎右衛門
- 吉田 九郎右衛門



